



TITLE:

編集後記ほか

AUTHOR(S):

---

CITATION:

編集後記ほか. Cue 2014, 32: 68-68

ISSUE DATE:

2014-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196284>

RIGHT:

---

## cue 32 号 目次

### 巻頭言

基礎研究と実用化 ―パワー半導体 SiC の進展―

…………… 昭和 37 年卒 名誉教授 松波 弘之…………… 1

### 大学の研究・動向

人間を支援するための行動センシングと協調のデザイン

……………工学研究科 電気工学専攻 情報メディア工学講座 複合メディア分野…………… 3

### 産業界の技術動向

関西電力の研究開発

……………関西電力株式会社 三浦 良隆…………… 10

新設研究室紹介…………… 16

研究室紹介…………… 18

平成 25 年度修士論文テーマ紹介 …………… 36

### 高校生のページ

計算電磁気学

……………工学研究科 電気工学専攻 電磁工学講座 電磁エネルギー工学分野 松尾 哲司…………… 56

### 学生の声

「研究者と餅屋」

……………情報学研究科 通信情報システム専攻 佐藤亨研究室 博士後期課程 3 年 橋本 大志…………… 62

「海外で研究をすること」

……………工学研究科 電気工学専攻 引原研究室 博士後期課程 3 年 八尾 惇…………… 62

### 教室通信

学位への誘い／学位論文の保存と公開

……………京都大学図書館機構長（附属図書館長）電気電子工学科長 引原 隆士…………… 63

### 賛助会員の声

鉄鋼業における電気制御技術の進展と電気技術者の関わり

……………新日鐵住金（株）名古屋製鐵所 制御技術室長 藤井 昭吾…………… 65

編集後記…………… 68

## 編集後記

本号の巻頭言にて、「how to make」に加え「what to make」を考える若い人たちを育成する重要性について述べられています。松波先生からのこのメッセージに強い共感を覚えます。前号の31号から数年さかのぼって巻頭言を読み返してみますと、過去20年近くにおよぶエレクトロニクス産業低迷への危機感と将来の関連分野における日本復権への期待が端々に述べられています。厳しい見方をすれば、日本がかつて「what to make」で世界をリードした例はそれほど多くないのではないかと感じます。本号巻頭言の中で、パワー半導体 SiC の基礎研究と実用化を例に「what to make」の成功例を示していただいたことで、今後ますます多くの技術分野で日本が「what to make」を創造し、真に世界をリードする日が来ることを期待します。本号の編集とりまとめに当たり、電気関係教室の中からより多くの「what to make」が生み出されることを願うとともに、創造性豊かな学生を育成する視点で教員として努力し続ける必要があると感じた次第です。最後になりましたが、ご多忙のところ本号にご寄稿頂いた皆様をはじめ、日頃より cue 誌及び電気関係教室の活動にご支援いただいている皆様に厚く御礼申し上げます。

[T.I. 記]